

改訂版片づけ行動尺度の作成と信頼性・妥当性の検討

元井 沙織*

Development of the Tidy-up Behavior Scale Revised and Examination of Its Reliability and Validity

Saori MOTOI*

The purpose of this study was to develop Tidy-up Behavior Scale Revised (TBS-R) and to examine the reliability and validity. The participants were 204 undergraduate students. Factor analysis showed that the TBS-R consisted of three factors structure; "classification", "disposal" and "orderliness". This scale had a sufficiently high degree of internal consistency (Cronbach's $\alpha=.79-.92$). The scale validities were confirmed on the basis on the relationship with both the Japanese version of the Saving Inventory-Revised (SI-R) subscales for measuring hoarding symptoms and the Japanese version of the Clutter Image Rating (CIR) for measuring clutter severity evaluated by a picture rating scale measuring the clutter of rooms. From this result, reliability and validity of the TBS-R was supported.

key words: tidy-up behavior, classification, disposal, orderliness, hoarding

問題と目的

近年では、片づけに関するマニュアル本が数多く出版され、メディアでも頻繁に片づけが取り上げられている。「どうすれば、うまく片づけられるのか」あるいは、「なぜ、片づけられないのか」という話題は、多くの人々に注目されている。

では、片づけて生活空間を整えることには、私たちの日常生活において、どのような心理的意味があるのだろうか。Mateo, Roberto, Jaca, & Blazsek (2013) は、職場環境が仕事の正確さに与える影響を検討し、散らかった環境では、片づいた環境より多くのミスを犯す可能性があることを明らかにしている。また、Smarr, Long, Prakash, Mitzner & Rogers (2014) は、整理されていない家では、時間と金銭の損失、ス

トレスの増加、課題遂行の効率と集中の減少、対人関係の負担など多くのネガティブな結果を招く可能性を指摘している。したがって、身の回りを片づけ、整えることにより、仕事や課題の効率を向上させたり、生活の中での様々な問題やストレスを回避することができると考えられる。また、Gosling, Ko, Manarelli & Morris (2002) は、多くの時間を過ごす生活環境や仕事環境を自分自身の好みに合わせて整えることで、より自分らしさを意識することができる」と述べている。このように自分に合った環境に整えていく過程として片づけを捉えると、片づけは誰にとっても日常生活において心理学的に重要な意味をもつものだとはいえる。

松田 (2006) は、片づけの本質は「元の状態」＝「きちんとした状態」に戻すことであり、片づけとい

* 目白大学大学院心理学研究科

Graduate School of Psychology, Mejiro University, 4-31-1 Nakaochiai, Shinjuku-ku, Tokyo 161-8539, Japan

う行為の中には、要る物と要らない物を判断し、要らない物を捨てる作業や、物の特徴に合わせて分類や組み合わせをして納まるべきところへしまう作業が含まれていると述べている。つまり、片づけとは単一の行動を指すのではなく、不要な物の処分、必要な物の分類、生活空間を整った状態にすることという、処分・分類・整頓の3つの要件にまとめられると考えられる。しかし、先行研究のほとんどが、これら3要素のいずれかを論じており、片づけ全体を捉えているとはいえない。

また、別の角度で「溜め込み (Hoarding)」という概念に着目し、尺度を用いた検討が行われているが (e.g., 池内, 2014; 池内, 2018; 土屋垣内・黒宮・五十嵐・堀内・安藤・鄧・吉良・津田・坂野, 2015), 「片づけられない」という側面のみを捉えている。溜め込みとは、溜めたいという衝動、あるいは捨てることの苦痛により、他人にとっては価値がないつまらないものでも、捨てることができず、溜め込んでしまう行為をいう (向井・中嶋・柳澤・林田・前林・林, 2014)。溜め込みは、精神医学的診断がつかない正常な人にも見られることがあり (仙波, 2007), 非臨床群を対象とした研究も行われている (e.g., 池内, 2014; 池内, 2018; 土屋垣内他, 2015)。捨てることができず、溜め込んでしまうということは、片づけができないということである。

片づけ全体を捉えるということは、「片づけられない」ことと「片づけられる」こと両方の側面について捉えられる尺度が必要である。元井・小野寺 (2018) は、片づけを「要らない物を処分し、要る物を分類、整頓すること」と定義し、片づけ行動尺度を作成した。この尺度は、大学生を対象とし、自室 (自室がない場合は自分が自由にできるスペース) の片づけについて尋ねており、自分の部屋 (自分のスペース) の物を分類する行動に関する「分類」、自分の部屋 (自分のスペース) 内を整った状態に保つ「整頓」、自分の部屋 (自分のスペース) 内にある不要な物を処分する行動に関する「処分」の3因子から構成されている。また、「片づけられているかどうか」という判断基準には個人差があり、客観的評定が難しいため、片づけの行動面に着目した文章表現で構成されている。したがって、元井・小野寺 (2018) の片づけ行動尺度は、上記の3つの片づけの定義に含まれる要件を網羅しており、片づけの実態を測定するのに有効

な尺度であると考えられる。

しかし、同尺度は以下の二点を考慮した場合、修正、改訂する必要がある。一点目は、文章表現に関する問題である。「現像した写真はアルバムや写真立てに入れて保管している」という項目が含まれているが、写真を現像するという表現は、現代の生活環境において一般的とはいえない。また、「雑誌や本などは大きさや種類を分類して収納している」など、複数の内容 (この項目の場合は、雑誌や本、大きさや種類) が含まれていることである。したがって、現代の生活環境に合わない表現を削除した上で、一つの項目では一つの内容を尋ねる (例えば「大きさごとに分類して収納している」「種類ごとに分類して収納している」) ように修正する必要がある。

二点目は妥当性に関する問題である。元井・小野寺 (2018) では、尺度の妥当性が検討されていない。

したがって、本研究では、文章表現を修正した改訂版片づけ行動尺度を作成し、信頼性ならびに妥当性を検証することを目的とする。妥当性については、因子的妥当性、収束的妥当性、そして、増分妥当性の3つを検討する。なお、本研究においても、元井・小野寺 (2018) と同様の定義で片づけを捉えるものとする。

先述したように、片づけに関係する概念として、「溜め込み」についての研究が行われている。したがって、本研究では、改訂版片づけ行動尺度と、溜め込み傾向を測定する尺度 Saving Inventory-Revised (SI-R) 日本語版 (土屋垣内他, 2015) との関連性を検証することによって、収束的妥当性の検討を行う。片づけ行動と、溜め込み傾向を測定する SI-R の各下位尺度の関連については、SI-R の「捨てられない」は、片づけ行動尺度の「処分」との負の関連が予測される。そして、SI-R の「散らかり」は、片づけ行動尺度の「分類」および「整頓」との負の関連が予測される。

また、片づけ行動が行われていなければ、部屋が散らかると考えられる。そこで、第二の収束的妥当性の検証として、部屋の散らかり状況を評価する Clutter Image Rating (CIR) 日本語版 (土屋垣内他, 2015) との関連性も検討することとした。片づけ行動尺度の「処分」「分類」「整頓」いずれも、部屋の散らかり状況を評価する CIR の得点とも負の相関がみられると予測される。

さらに、類似した概念と考えられる溜め込み傾向 (SI-R の得点) の影響を統制した場合でも、片づけ行動と部屋の散らかり状況 (CIR の得点) との負の関連が示されれば、改訂版片づけ行動尺度が部屋の散らかり状況に独自の影響を及ぼしていることが確認でき、本尺度の増分妥当性の証拠が得られたと考えられる。

方 法

調査対象者

東京都内の大学 (1 校) に通う大学生 240 名に質問調査を実施し、回答に不備のあったものを除く 204 名 (男性 66 名, 女性 137 名, 不明 1 名, 平均年齢は 19.57 (SD=0.95) 歳) を分析対象とした。

調査手続き

2018 年 1 月に大学の講義開始前、または終了直前に調査を実施した。

倫理的配慮として、調査におけるプライバシーへの配慮および回答の非強制性、回答内容や回答の有無によって何ら不利益が生じないことなどを説明した後、同意を得られた場合のみ回答を求めた。回答は無記名で行われた。なお、本研究における調査内容は、調査対象における侵襲性が低く、倫理的問題がないと目白大学倫理審査委員会の予備審査で判断された。

調査内容

片づけ行動 元井・小野寺 (2018) の片づけ行動尺度の現代の生活環境に合わない表現ならびに複数の内容が含まれている項目について、表現の修正を行った。修正に際しては、心理学を専門とする大学教員 1 名と心理学を専攻とする大学院生 4 名との協議により論理的な整合性と内容の妥当性に配慮して項目を検討し、全 17 項目を新たに片づけ行動尺度として設定した。自分の部屋 (自分の部屋がない場合は自分の自由にできるスペース) について各項目についての評定を求めた。なお、本研究では、普段の片づけ行動を尋ねることから、選択肢の表現も修正を行い、「1: まったくそうしていない」から「4: いつもそうしている」の 4 件法での回答を求めた。

溜め込み傾向 土屋垣内他 (2015) の Saving Inventory-Revised (SI-R) 日本語版を用いた。この尺度は、溜め込み症状を測定する尺度で、「散らかり」9 項目、「入手」7 項目、「捨てられない」7 項目の全

23 項目からなる。質問項目によって、症状の強さや精神的苦痛の程度 (「0: まったくそうでない」から「4: ほぼすべて/完全に」) もしくは、「0: まったくない」から「4: 非常に」) あるいは症状の頻度 (「0: まったくない」から「4: かなり頻繁に」) について 5 件法で回答を求めた。得点が高い程、溜め込み傾向が高いことを示す。

部屋の散らかり状況 土屋垣内他 (2015) の Clutter Image Rating (CIR) 日本語版を用いた。この尺度は、9 つの写真 (それぞれの写真に 1 から 9 の数字が付与され、その数字の増大に伴い散らかりの程度が増す) から現在の自分の部屋の散らかりの程度に最も近いものを選択する写真評価尺度である。Tsuchiyagaito, shimizu, & Nakagawa (2015) によって、信頼性と妥当性が確認されている。原版は、台所、居間、寝室の 3 つの空間についてそれぞれ尋ねるが、本研究では、自室 (自分のスペース) の片づけ行動を調査範囲としているため、寝室の写真のみを用いた。

結 果

片づけ行動尺度の構成

まず、片づけ行動に関する 17 項目について、評定の平均値と SD を算出した (Table 1)。平均値 \pm 1SD を基準として天井効果と床効果を検討したところ、すべての項目で天井効果および床効果がみられないことを確認した。そこで、全 17 項目に対して因子分析 (主因子法・Promax 回転) を行った。その結果、初期解における固有値の減衰状況 (6.99, 2.42, 1.45, 0.79...) および因子の解釈可能性から 3 因子解が妥当であると判断した。いずれの項目も、いずれかの因子に .40 以上で負荷し、かつ複数の因子に負荷していないことから 17 項目すべてを採用した。Promax 回転後の因子負荷量を Table 1 に示す。

第 1 因子は、「種類ごとに分類して収納している」など 6 項目が含まれ、自分の部屋 (自分のスペース) の物を分類する行動に関する項目に負荷量が高かったことから、「分類」因子と命名した。第 2 因子は、「一度も使っていない物でも、いらぬ物は処分している」など 6 項目が含まれ、自分の部屋 (自分のスペース) 内にある不要な物を処分する行動に関する項目に負荷量が高かったため、「処分」因子と命名した。第 3 因子は「とりあえず置いたものをそのまま放置している」という項目にもっとも高い負荷が確

Table 1 改訂版片づけ行動尺度の因子分析結果 (主因子法・Promax 回転) および各項目の平均値と標準偏差

	F1	F2	F3	共通性	M	SD
F1. 分類因子 ($\alpha = .92$)					2.74	0.79
14. 種類ごとに分類して収納している	1.02	-.09	-.14	.81	2.89	0.95
13. 大きさごとに分類して収納している	.90	-.08	.01	.75	2.57	0.95
15. 用途ごとに分類して収納している	.83	.01	-.02	.68	2.73	0.96
12. 部屋 (自分のスペース) の中でそれぞれ物の定位置を決めている	.74	.02	.03	.59	2.89	0.96
16. どこに何があるか, 分かるように収納している	.57	.09	.22	.60	2.78	0.89
11. 使いやすいように収納している	.56	.16	.18	.62	2.57	0.93
F2. 処分因子 ($\alpha = .87$)					2.47	0.79
9. 一度も使っていない物でも, いらぬ物は処分している	-.15	.81	.08	.59	2.59	1.07
8. 現時点で使う予定がない物は処分している	-.07	.80	.04	.62	2.45	1.00
7. 思い出の物でも, いらぬ物は処分している	-.01	.77	-.07	.55	2.32	1.04
6. 人から貰った物でも, いらぬ物は処分している	.13	.77	-.21	.60	2.39	1.05
5. まだ使える物でも, 気に入らぬ物は処分している	.00	.68	.01	.47	2.40	0.96
10. 必要なくなった物はすぐに処分している	.10	.59	.04	.44	2.66	0.99
F3. 整頓因子 ($\alpha = .79$)					2.30	0.67
17. とりあえず置いた物をそのまま放置している ^{R)}	.06	.18	-.76	.46	2.67	0.91
3. 基本的に, 家具以外の物を床に置いていない	.01	.10	.68	.53	1.96	0.99
2. 使ったものは, 使用後すぐに元あった場所へ戻している	.02	-.01	.67	.46	2.55	0.77
4. 机の上には, 必要な物しか置いていない	.13	.12	.59	.54	1.93	0.93
1. 着ていた服を脱いだ時の形で放置している ^{R)}	.01	.04	-.55	.28	2.29	0.93
因子間相関	F1	—	.53	.61		
	F2		—	.38		

R) 逆転項目

認されたが, 値は負の方向になっている。そのため, 放置することとは逆の方向性の内容であると考えられる。そして, 「使ったものは, 使用後すぐに元あった場所へ戻している」など自分の部屋(自分のスペース)内を整った状態に保つ項目に正の方向で負荷量が高かったことから, 「整頓」因子と命名した。なお, 「整頓」とは, 乱れた状態を整った状態にすることであり, 物を一定の基準に従って種類別に分ける「分類」とは異なる内容と考えられる。それぞれの α 係数は, 「分類」が.92, 「処分」が.87, 「整頓」が.79であり, 内的整合性の観点から信頼性が確認された。

因子的妥当性の検証

改訂版片づけ行動尺度の因子的妥当性を検討するために, 探索的因子分析で得られた3因子を想定して確認的因子分析を行ったところ, 適合度は $\chi^2_{(116)} = 276.00$ ($p < .001$), CFI=.91, TLI=.90, RMSEA=.08 (90%CI [.07, .10])であった (Figure 1)。

SI-R と CIR の得点の処理

溜め込み傾向を評定する SI-R の各下位尺度については, α 係数を算出したところ, 「散らかり」が.86, 「入手」が.60, 「捨てられない」が.77であった。「入

手」については若干低い値を示したが, おおむね十分な信頼性が得られたことから, それらの項目の評定値の平均をもって得点の算出を行った。部屋の散らかり状況を評価する CIR は, それぞれの写真に付与された1から9の数字の増大にともない, 散らかりの程度が増すように設定されている。分析では, この1から9の数字をそのまま CIR 得点として用いた。SI-R の各下位尺度得点および CIR 得点の平均値と標準偏差を Table 2 に示す。

収束的妥当性の検証

改訂版片づけ行動尺度の収束的妥当性を検討するために, 改訂版片づけ行動尺度と, SI-R および CIR の得点との間で相関分析を行った。さらに, 片づけ行動の該当する変数以外の2変数の得点を統制して偏相関分析を行った (Table 2)。個人間相関に基づいた妥当性の検討が多く繰り返されているが, 交絡変数を統制することで, 個人内相関に関する妥当性の証拠を見出すことが可能であると考えられる (村山, 2012)。

改訂版片づけ行動尺度の下位尺度得点と SI-R の下位尺度得点との偏相関分析では, 次の結果が得ら

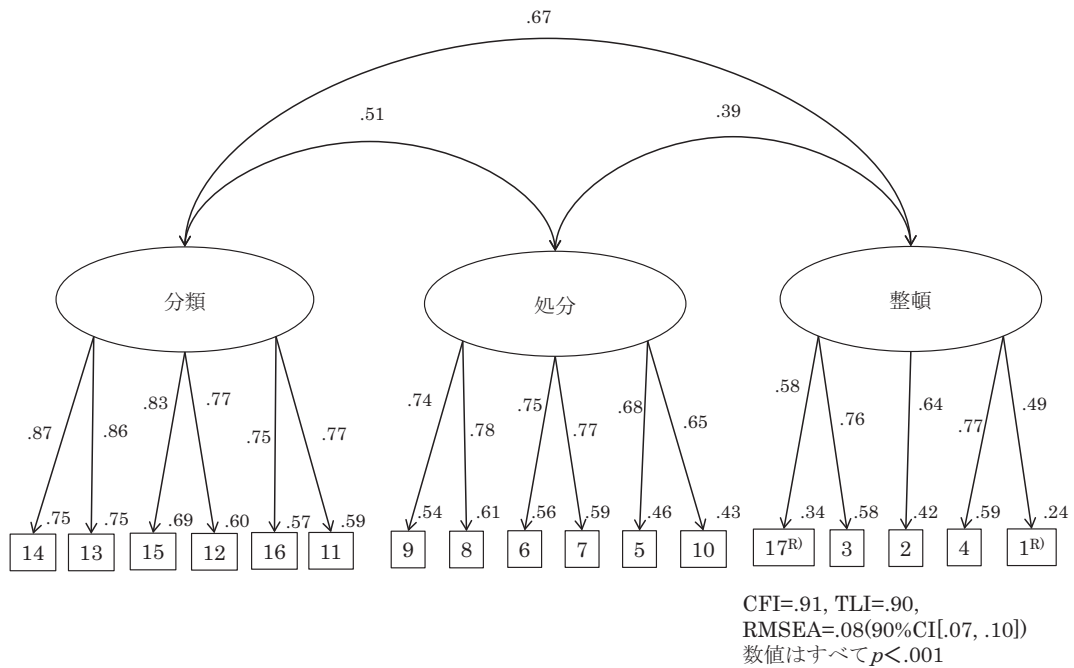


Figure 1 片づけ行動尺度の確認的因子分析結果

注) 観測変数内の数字番号を表す。また、煩雑なため、誤差変数は省略している。

R) は逆転項目。逆転処理の後に分析を行った。

Table 2 改訂版片づけ行動の下位尺度と CIR および SI-R の下位尺度の相関係数、偏相関係数、平均値、標準偏差

	片づけ行動						M	SD
	分類		処分		整頓			
	r	pr	r	pr	r	pr		
SI-R								
散らかり	-.50***	-.20**	-.35***	-.13	-.56***	-.39***	1.42	0.73
入手	-.27***	-.05	-.29***	-.19	-.29***	-.17*	1.46	0.73
捨てられない	-.43***	-.09	-.58***	-.47***	-.37***	-.18*	1.46	0.80
CIR (写真評価尺度)	-.54***	-.24**	-.33***	-.10	-.56***	-.37***	2.00	0.88

注) r は相関係数を、pr は偏相関係数を表す。偏相関分析では、当該の片づけ行動以外の2つを統制変数とした。

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

れた。「分類」については、「散らかり」のみ有意な弱い負の偏相関が確認された ($pr = -.20, p < .01$)。「処分」については、「捨てられない」のみ有意な中程度の負の偏相関が確認された ($pr = -.47, p < .001$)。「整頓」については、「散らかり」との間に中程度の負の偏相関が確認され、「入手」と「捨てられない」との間に弱い負の偏相関が確認された (それぞれ $pr = -.39, p < .01$; $pr = -.17, p < .05$; $pr = -.18, p < .05$)。

改訂版片づけ行動の下位尺度と CIR 得点との偏相関分析では、次の結果が得られた。「分類」と CIR との間には、有意な弱い負の偏相関が確認され ($pr = -.24, p < .01$)、「整頓」と CIR 得点の間には、有意な中程度の負の偏相関が確認された ($pr = -.37, p < .001$)。「処分」と CIR 得点の間には、有意な偏相関は確認されなかった。

Table 3 散らかり状況への階層的重回帰分析結果 (β)

	step1	step2
SI-R		
散らかり	.72***	.53***
入手	-.12	-.11
捨てられない	-.01	-.11
片づけ行動		
分類		-.15*
処分		-.10
整頓		-.22**
R^2	.43***	.52***
ΔR^2		.09***

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$

片づけ行動尺度の増分妥当性の検証

改訂版片づけ行動尺度が溜め込み傾向を測定するSI-Rとは異なる構成概念を測定できているかという点から、改訂版片づけ行動尺度の増分妥当性の検証を行った。そのため、溜め込み尺度の影響を統制したうえで、片づけ行動が部屋の散らかり状況に影響するかどうかを階層的重回帰分析によって検討した(Table 3)。

独立変数として、step1にSI-Rの下位尺度(散らかり, 入手, 捨てられない), step2に片づけ行動の下位尺度(分類, 処分, 整頓)を投入し、従属変数をCIRとして分析を行った。その結果、SI-Rの影響を統制した場合でも、分類($\beta = -.15$, $p < .05$)と整頓($\beta = -.22$, $p < .01$)はそれぞれCIRに対して有意な負の影響が確認された(step1, step2それぞれ $F(3,188) = 47.60$, $R^2 = .43$, $p < .001$; $F(6,185) = 33.30$, $R^2 = .52$, $p < .001$)。また、step2として改訂版片づけ行動尺度(分類, 処分, 整頓)を投入することで説明率が有意に増加することも確認された($F(3,185) = 11.23$, $\Delta R^2 = .09$, $p < .001$)。

考 察

本研究の目的は、改訂版片づけ行動尺度を作成し、尺度の信頼性と妥当性を検討することであった。改訂版片づけ行動尺度の信頼性については、Cronbachの α 係数を算出することで検討を行った。さらに、改訂版片づけ行動尺度の妥当性の検証については、因子的妥当性と収束的妥当性、そして、増分妥当性についての検討を行った。

因子的妥当性と信頼性

まず、片づけ行動に関する17項目について、探索的因子分析の結果、「分類」「処分」「整頓」の3因子構造が認められた。これは、元井・小野寺(2018)と同様の因子構造である。その後、得られた3因子について確認的因子分析を行った。その結果、CFI, TLI, RMSEAにおいて、許容される適合度が得られたが、 χ^2 は有意であり適合度は許容されなかった。ただし、 χ^2 は標本数が増えるほど有意となりやすく、 χ^2 のみで妥当性が損なわれると判断することは困難である。そのため、適合度指標を総合的に判断すると、因子的妥当性を支持する証拠が得られたと考えられる。また、信頼性については、Cronbachの α を算出し、十分な数値が示されたことから、内的整合性の観点からの信頼性が確認された。

収束的妥当性

片づけ行動の下位尺度と溜め込み傾向を評定するSI-Rの下位尺度(「散らかり」「入手」「捨てられない」との偏相関分析の結果では、「分類」は「散らかり」と、「処分」は「捨てられない」と、「整頓」は「散らかり」「入手」「捨てられない」いずれとも負の関連が確認された。また、片づけ行動の下位尺度の「分類」および「整頓」と部屋の散らかり状況を評価するCIRとの間に負の関連が示されたことから、片づけ行動の「分類」と「整頓」のいずれの行動についても部屋の散らかり状況と関連していた。片づけ行動と、SI-RおよびCIRとの間に負の関連があったことは仮説と部分的に一致している。片づけ行動の「処分」とCIRとの関連が確認されなかったことから、不要な物を処分しないままにいることと、部屋が散らかることとは必ずしも関連しないことが示唆された。つまり、不要な物を持ち続けることで、部屋に物を多く保有していたとしても、それらの物を分類し、整頓していれば散らからずに過ごすことができるとも考えられる。一方で、片づけ行動の「整頓」が、SI-Rの「入手」と「捨てられない」とも関連が認められたことから、物を入手し、捨てられずにいることで、物が部屋の中にあふれて床や机などに物を置かざるを得なくなり、整った状態を維持することが難しくなることも推察される。

尺度の増分妥当性

ついで、SI-Rの影響を統制したうえで、片づけ行動がCIRに影響するかどうかを階層的重回帰分析

によって検討した結果では、SI-Rの影響を統制した場合でも、「分類」と「整頓」から、CIRに対して有意な負の影響が確認された。また、step2として片づけ行動を投入することで説明率(R^2)が有意に増加することも確認された。SI-Rと改訂版片づけ行動尺度の各下位尺度の相関の程度が弱から中程度であったことも合わせて、片づけ行動と溜め込み傾向は、それぞれ別の概念を捉えているということが示唆された。このことから、改訂版片づけ行動尺度の増分妥当性の証拠が得られた。この結果からも、片づけ行動という一つ概念として捉えていくことの意義が示されたと考えられる。

片づけ行動尺度の特徴

以上のことから、改訂版片づけ行動尺度には一定の信頼性と妥当性があることが示唆された。本尺度は、片づけを「分類」「処分」「整頓」の3つの側面から捉えている。偏相関分析の結果では、「分類」と「整頓」については、SI-Rの下位尺度の「散らかり」およびCIRとの間に、強い負の関連があった。それに対し、「処分」については、SI-Rの下位尺度の「捨てられない」との間に強い負の関連があった。また、階層的重回帰分析の結果では、「処分」のみ、CIRへの有意な影響がなかった。これらのことから、「分類」および「整頓」は、「処分」とは異なる特徴を示すものと推察される。これらの下位尺度の特徴から、本尺度が捉える片づけ行動を次のように説明できる。すなわち、片づけという行動は、不要な物を「処分」することで、自室(自分のスペース)の物が増えすぎないように管理し、必要な物を一定の基準に従って種類別に「分類」し、物の定位置を決め、定位置から出した物を元の場所に戻して「整頓」し、乱れた状態を整えるという一連の行動である。

本尺度を用いることで、「片づけができる(できている)」「片づけができない(できていない)」の二極ではなく、「分類」「処分」「整頓」のいずれの部分に得意あるいは苦手があるのか、多面的に片づけを捉えることで、個人の片づけ行動の特徴を明らかにしていくことが可能になると考えられる。本尺度の下位尺度(「分類」「処分」「整頓」)を用いて、個人の片づけ行動のタイプを抽出し、各片づけ行動タイプの特徴を明らかにすることもできる。つまり、本研究で、改訂版片づけ行動尺度を開発したことで、より詳細に一般的な人々の片づけ行動を捉えるための指標として

活用できると考えられる。それにより、個人が必要としている片づけに関する情報を提供するために役立つと期待される。

今後の展望

以下に、本尺度を用いた今後の研究の展望を述べる。多くの人々が注目している「どうすれば、うまく片づけられるのか」「なぜ、片づけられないのか」という疑問に答えていくためにも、片づけ行動に影響する個人内要因や環境要因を検討することが求められる。例えば、Smarr et al.(2014)は、片づけに必要な能力として、片づける物や空間を把握する知覚的能力や、決断や注意、記憶といった認知的な能力を挙げている。こうした、個人の能力や性格特性、片づけをする動機づけなどが、どのように片づけ行動に影響しているのかを、実証的に明らかにしていくことで、「片づけられない原因」や「片づけるために必要な方策」を提案していくことにつながると考えられる。

メディアで片づけが注目される背景には、より深刻な「片づけられない問題」を抱える人々の存在もある。片づけに関する知見が示されることにより、片づけられない人々にとっても、片づけられない人々を支援する人々にとっても、助けとなると考えられる。

本研究の限界

最後に、本研究の限界を二点述べる。第一に、本研究では、片づけ行動が部屋の散らかりの状況に及ぼす影響を検討したが、片づけ行動と散らかり状況を同時点で評定を求めた。今後は、縦断的データを用いて予測的妥当性の検討をすることが求められる。

第二に、本研究では、大学生を対象としている。そのため、大学生以外の成人や子どもへの適用の可能性は未検討である。今後、研究対象者を拡張し、大学生以外の対象者にも本尺度が適用できるか検討することで、尺度の一般性を確認することが望ましい。

引用文献

- Gosling, D. S., Ko, S. J., Mannarelli, T., & Morris, E. M. 2002 A Room With a Cue: Personality Judgments Based on Offices and Bedrooms. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 379-398.
- 池内裕美 2014 人はなぜモノを溜め込むのか—ホーディング傾向尺度の作成とアニミズムとの関連性の検討 *社会心理学研究*, **30**, 86-98.
- 池内裕美 2018 溜め込みは何をもたらすのか—ホーディング傾向とホーディングに因る諸問題の関係性に

- 関する検討 社会心理学研究, **34**, 1-15.
- Mateo, R., Roberto, H. J., Jaca, C., & Blazsek, S. 2013 Effects of tidy/messy work environment on human accuracy. *Management Decision*, **51**, 1861-1877.
- 松田純子 2006 子どもの生活と保育—「かたづけ」に関する一考察— 実践女子大学生活科学部紀要, **43**, 61-71.
- 元井沙織・小野寺敦子 2018 大学生の片づけ行動に及ぼす両親の影響—片づけ要求と片づけ態度からの検討— 目白大学心理学研究, **14**, 45-55.
- 向井馨一郎・中嶋章浩・柳澤嘉伸・林田和久・前林憲誠・林陽次 2014 DSM-5の溜め込み障害 (hoarding disorder)の3症例—診断や臨床像, 治療に関する検討— 臨床精神医学, **43**, 1517-1524.
- 村山航 2012 妥当性—概念の歴史の変遷と心理測定学的観点からの考察— 教育心理学年報, **51**, 118-130.
- 仙波純一 2007 特集—強迫の診立てと治療II 強迫性障害の亜型としての“compulsive hoarding”(強迫のためこみ) 精神科治療学, **22**, 633-638.
- Smarr, C.-A., Long, S. K., Prakash, A., Mitzner, T. L., & Rogers, W. A. 2014 Understanding younger and older adults' needs for home organization support. *Proceedings of the Human Factor and Ergonomics Society*, **58**, 150-154.
- 土屋垣内晶・黒宮健一・五十嵐透子・堀内 聡・安藤孟梓・鄧科・吉良晴子・津田 彰・坂野雄二 2015 ためこみ傾向を有する日本の青年の臨床的特徴 不安症研究, **6**, 72-85.
- Tsuchiyagaito, A., Shimizu, E., & Nakagawa, A. 2015 Psychometric Properties of the Clutter Image Rating among Japanese Adolescents. *The 22nd annual OCD conference*. Westin Boston Waterfront, Boston, MA.

(受稿: 2019.7.5; 受理: 2020.3.25)